

## ベンヤミンにおける〈判じ絵〉の解読 ——後期言語論の射程をめぐって——

小林 永規

はじめに

ヴァルター・ベンヤミンの言語に対する関心は持続的なものであり、1916年の『言語一般および人間の言語について』を皮切りとし、自身のボードレール翻訳の序文として書かれた『翻訳者の使命』、さらには『ドイツ悲劇の根源』においてアレゴリー論や文字論を展開した後に、再び1933年には模倣と言語の関係について短い論考を著している。通例、後期言語論と呼ばれる『類似したものについての試論』、およびその改定稿である『模倣の能力について』という二つの作品は、非常に小さな作品であるとはいえ、ベンヤミン自身が初期言語論と比較しつつ著述を行ったという事情から推し量るに、<sup>1</sup>そこには一貫した問題関心の追及が見出されると予測できるだろう。

とはいえ、この後期言語論においては、はっきりと初期言語論との繋がりが明示されているわけでもなく、かつての主題であるアダムの言語や人間の命名言語についても言及されていない。本稿の主要な目的は、これら両作品のうちでの思考の一貫性、そして初期から後期にかけてなされた展開を追求することである。この考察は同時に、後の作品から振り返ることで、ベンヤミンの初期思想の意義を再考するという目的意識のもとでなされる必要がある。というのも、初期言語論はベンヤミンの思考範型の萌芽として着目されながらも、生前には未刊行であり一部の友人にのみ公開されていたというテキスト事情も重なり、いかなる積極的意義をもつのかという点に関して定まった解釈があるとは言い難い

---

<sup>1</sup> ベンヤミンは旅先で模倣論を執筆する際、初期言語論を自ら持ち合わせていなかったため、その写しを所持しているショーレムに送り届けてもらえるように依頼している。Vgl. Benjamin, Walter: *Gesammelte Briefe*, Hrsg. v. Gödde, Christoph / Lontiz, Henri, Frankfurt am Main 1995, Bd. IV, S. 214, 222. 以下、ベンヤミンの書簡からの引用は同書簡集を用い、略号 GB および、巻数、頁数を記す。

からである。たとえば、たしかに初期言語論における言語を道具とみなす把握に対する批判は我々の言語使用に対する痛烈な批判を含むものであり、こうした批判精神は彼の思考のうちに一貫して認められる注目すべき要素であるかもしれない。だがその一方で、〈墮罪〉を経たものとして描かれた我々の言語にいかなる可能性が残されているのかという点は初期言語論のうちで示されているとはいいがたい。さらには、自らの言語観を神秘主義的な言語観から区別するベンヤミン<sup>2</sup> が神の言語やアダムの言語といった語彙を用いているということにはいささかの違和感がつきまとう。

こうした事情から、墮罪からの救済というパースペクティブにとらわれていたとして、そこに初期ベンヤミンの限界を見出そうとする解釈がしばしば提出されることにもそれなりの理由があるといえよう。<sup>3</sup> とはいえ、こうした解釈はベンヤミンが現代を行き詰った罪にとらわれた状態とみなしつつ、そうした現状を認めた上で突破口を求めていたこと、そして初期思想に見出される後の思想への重要な萌芽を見失わせることになりがちである。それゆえ、ベンヤミンの言語哲学全体における積極的な提言を再構成することにより、彼の思想の真意を問いただすことが必要であると考えられる。

それでは、模倣論はベンヤミンの思想の中でいかなる位置づけが可能であろうか。まず、「模倣」や「類似性」といった問題群が、決して後期言語論において突如現れたものではなく、初期のベンヤミンにとって重要な考察の主題であったことを確認する必要がある。そうした意味で、次のショーレムによる 1918 年頃のベンヤミンについての報告は示唆的である。

すでに当時ベンヤミンは、知覚を平面 *Flache* の状況布置 *Konfiguration* における読解とする考えに取り組んでいた。太古の人間は、自らの周辺の世界、とりわけ天空をそうした平面と見なし、この平面の状況布置を読んでいたのである。ここには、彼が何年か後に『類似したものについての試論』の著述の中で行うこととなった考察の萌

<sup>2</sup> Vgl. Benjamin, Walter: *Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*. In: *Gesammelte Schriften*. Hrsg. v. Tiedemann, Rolf / Schweppenhäuser, Hermann, Frankfurt am Main 1991, Bd. II, S. 150. 以下、ベンヤミンの著作からの引用は同全集を用い、略号 GS および、巻数、頁数を記す。

<sup>3</sup> たとえば、森田團は『ドイツ悲劇の根源』のアレゴリー論が初期言語論の「墮罪」から解釈されるがゆえに原初的な自然の取戻しというモチーフに規定されているとみなしている（森田團『ベンヤミン——媒質の哲学』(水声社 2011 年)、257~268 頁参照)。

芽がある。彼の主張するところでは、天空という平面上の状況布置としての星座 *Sternbild* の成立は、読むことの、そして神話的時代の形成とともに崩壊した文字の端緒であるという。つまり星座とは、神話的時代にとっては、後に「聖なる書」の啓示となったものであったというのである。<sup>4</sup>

ここでのショーレムの発言の中で、重要な点を三つ指摘することができる。一つは、1918年頃、すなわち初期言語論が書かれたのとはほぼ同時期の段階で、後の模倣論における〈非感性的な類似〉の論点がすでに提出されていることである。第二に、ここでは太古の人間の在り方に即して述べられている「知覚を平面の状況布置における読解とする考え」は、同時期に成立したと推測される断片の中でも考察されており、<sup>5</sup> よりまとまった著作の中で表立って言及されていないとはいえ、ベンヤミンが常に念頭に置いていた認識論的な発想であるとみなすことができる。そして第三に、そうした知覚論において例証として挙げられている「星座」や「文字」は、バロック論における重要な主題となっており、その場に応じた一例として看過することが難しい共通点をもっている。

こうした諸々の点を踏まえ、本稿ではベンヤミンの模倣論が彼の言語哲学を基盤とした認識論の中で、いかに位置づけられるかを考察する。それによって、初期言語論には現れていなかった、日常的な現実を〈判じ絵〉として読み直していこうとする彼の思想が明らかとなるであろう。またその際、この〈判じ絵〉の読み解きというモチーフが複製技術論や歴史哲学といった言語論以外の著作においても重要な思考範型となっていることを確認していく。

## 1. 非感性的類似と模倣

真の実在を真似ているにすぎないとして、模倣を低次の段階に位置づけようとする見解はプラトンの詩人批判以来、あまりに有名である。あるいは、模倣とは単なる真似事であ

---

<sup>4</sup> Scholem, Gershom: *Walter Benjamin – die Geschichte einer Freundschaft*. Frankfurt am Main 1987, S. 80. なお、ベンヤミンは *Konfiguration* (あるいは *Configuration*) とほぼ同系統の語としてしばしば *Konstellation* を用いている。これら二つの語は通例、「状況布置」あるいは「星座」という訳語を与えられており、ベンヤミンもこの二義性を生かしつつ議論を展開していると想定することがができる。それゆえ、本稿で引用中にこれらの語が現れる際には、元となるテキストの文脈に応じて適切と思われる訳語を選ぶこととする。

<sup>5</sup> Vgl. Benjamin, Walter: Notizen zur Wahrnehmungsfrage. In: GS, Bd. VI, S. 32-33.

る以上、新たなものを生み出す創造性に欠けているとみなすこともできよう。こうした模倣に対する否定的な見解は、もちろんベンヤミンにも皆無というわけではなく、初期言語論では、何が善であり悪であるかをめぐる墮罪状態にある人間の言語は、神の「創造する語の非創造的な真似事 *Nachahmung*」であり、「パロディー」であるとされている。<sup>6</sup>

しかし、後期言語論で述べられる「模倣の能力 *das mimetische Vermögen*」は、人間のもつ「類似性を生み出す最も高度な能力」<sup>7</sup>に着目したものであり、いわば神の言語のような絶対的な規範なき状態における、人間のある種の創造的な行為についての考察であるといえよう。ここでいう模倣の創造的な側面として、ベンヤミンはまず、子どもの遊びを例として挙げている。子どもの行う、いわゆるごっこ遊びは、商人や先生などといった比較的真似のしやすいものにとどまらず、風車や電車など、およそどのように真似ればよいか分かりにくいものにまで及んでいる。<sup>8</sup> 一見、些細なようではあるが、後者の模倣に関しては模範となる明確な基準がありえないという点が重要である。

とはいえ、大半の子どもは、成長とともにこうした自由で柔軟な発想を失い、あるべき規範を身につけるようになるであろう。ベンヤミンは、こうした模倣の能力の衰退を、個体としての人間のみならず、「系統発生的な」、つまり人類史における過程のうちにも見てとっている。

周知のように、かつて類似性の法則によって徹底して支配されていると思われていた生活領域は、はるかに大規模なものであった。かつてはマイクロコスモスとマクロコスモスがそうであった。とはいえ、これは歴史の経過のうちで類似性の経験が見出した数多くの把握のうちの一つにすぎないのであるが。(中略) その際、模倣的な力も、

---

<sup>6</sup> Benjamin, Walter: Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen. In: *GS*, Bd. II, S. 153.

<sup>7</sup> Benjamin, Walter: Lehre vom Ähnlichen. In: *GS*, Bd. II, S. 204. なお、『類似したものについての試論』と比べて、改定稿の『模倣の能力について』は表現が切り詰められており、同一の論旨の箇所に関しても若干の表現の異同が見受けられる。この修正に関して、ベンヤミン全集の編者注では、神秘主義的・オカルト的な叙述を控え、より多くの読者の理解を得るためであると述べられている (vgl. *GS*, Bd. II, S. 950)。しかし、メンシングハウスも指摘するように、平俗化のための変更を被っていない第一稿だからこそ本質的な表現がなされているという見解は説得的であるため、本稿では改定稿にしは見受けられない表現のある場合を除き、基本的に第一稿である『類似したものについての試論』からのみ引用をおこなう。Vgl. Menninghaus, Winfried: *Walter Benjamins Theorie der Sprachmagie*, Frankfurt am Main 1986, S. 60-61.

<sup>8</sup> Benjamin, Walter: Lehre vom Ähnlichen. In: *GS*, Bd. II, S. 204-205.

模倣の客体、つまり模倣の対象もまた、時の経過のうちでは、変わらずに同一のものであり続けることはないことを考慮する必要がある。<sup>9</sup>

マクロコスモスとしての宇宙全体とミクロコスモスとしての人間の間にある照応関係は、いくら我々が自らを自然の一部と見なそうとしたところで、太古の人間の感じ取っていたものからは遥かに隔たっている。そうした隔たりの顕著な例として、ベンヤミンは過去の占星術の経験を挙げている。占星術においては、星の配置と人間の運命の間にある類似性までもが知覚され、星座のような「天空の出来事」<sup>10</sup> さえも模倣可能なものであった。そして、自然の理と人間の運命といった一見何の関わりもないと思われるところに生み出される類似性は、通常感覚によって知覚される感性的類似と区別するため、「非感性的類似」<sup>11</sup> と呼ばれ、人間のもつ高度な模倣の能力が拠って立つ基盤とされるのである。ベンヤミン自身は、「非感性的類似」の例として占星術における照応関係と、後述するように言語とその指示対象との結びつき以外の例を挙げていないため、分かりづらい概念であるが、重要なのはその働きである。というのも、「非感性的類似」が高度な能力とされるゆえんは、一見するとかけ離れた個々の対象の間に繋がりを見出すという創造的な契機を含むためである。換言すると、未知の対象を見出すという本来の意味での発見は、この非感性的な類似によって成り立つのである。

それでは、ベンヤミンは子どもや太古の人々が知覚していた非感性的な類似に立ち戻るべきだということであろうか。たしかに、ベンヤミンは子どもの絵本やおもちゃを蒐集することに執心し、他の著作でもオカルト的な領域にしばしば関心を寄せており、<sup>12</sup> そうした失われたものに対する回帰願望が全く見受けられないわけでもない。だが、それよりもいっそう重要なのは、非感性的な類似を知覚することによって成り立つ「模倣の能力は消失

---

<sup>9</sup> A. a. O., S. 205.

<sup>10</sup> Ebd., S. 206.

<sup>11</sup> Ebd., S. 207.

<sup>12</sup> たとえば、ミヒヤエル・オーピッツも指摘するように、『ドイツ悲劇の根源』の中でアヴィ・ヴァールブルクの『ルター時代の言葉と図像における異教的・古典古代的予言』が言及されていることもまた、ベンヤミンの占星術に対する持続的な関心をうかがわせる。Vgl. Opitz, Michael: *Ähnlichkeit*. In: Opitz, Michael / Wizisla, Erdmut (Hrsg.): *Benjamins Begriffe*. Frankfurt am Main 2000, Bd. I, S. 15-49, hier S. 26-31.

したのか、あるいはひょっとすると、この能力に生じた何らかの変化があるのか<sup>13</sup> という問いである。そもそも、すでに確認したように、昔の人間とわれわれの知覚の在り方は大きく異なっており、そこへの回帰が可能かどうかすらはっきりとしない。それゆえむしろ、歴史の経過のうちでの、その都度における知覚様式に着目することでいかなる変化が生じているのかを発見する機縁とすること、つまりこの場合では、歴史の経過のうちで模倣の能力はそもそも消失し全くの無と化したのか、あるいは模倣の能力は変容を被りはしたが現在のわれわれにもいくばくかの創造的な能力が残存しているのか、もしそうならば何をなしうるかを問いただすことこそ必要である。

ベンヤミンは、この問いに対して、後者の模倣の能力の変容という立場でもって応えている。そして、この模倣の能力に生じた変化に伴って着目されるのが、言語における変化である。

模倣することは、魔法のような行為でありえよう。しかし、それと同時に、模倣をなす者は自然を言語へと接近させることによって、自然を魔法から解放するのである。

14

無関係と思われる二項間において模倣をなすという「魔法のような行為」は、それが言語化されることで判明なものとなり、脱魔術化される。加えてここで注意すべきは、そうした脱魔術化をなす言語にも、ある種の魔術性が伴っているという点である。たとえば、ある言葉が一定の対象と結びつきうるのは何故かという問いを思い浮かべるならば、そこに明確な答えを見出すことはできない。ベンヤミンが拒んでいる擬音語によってそうした言葉の成り立ちを解明しようとするアプローチ<sup>15</sup> にしても、この飛躍を十分に埋めることはできない。とはいえ、言語のうちに残存している変容した模倣の能力を見出すことによつてどのような意義があるというのか。おそらくその背景にあるのは、初期言語論の成立とほぼ同時期に行われていた「知覚」と「読むこと」への取り組みである。

---

<sup>13</sup> Benjamin, Walter: *Lehre vom Ähnlichen*. In: *GS*, Bd. II, S. 206.

<sup>14</sup> Benjamin, Walter: *GS*, Bd. II, S. 956.

<sup>15</sup> Vgl. Benjamin, Walter: *Lehre vom Ähnlichen*. In: *GS*, Bd. II, S. 207.

## 2. 知覚と読むこと

冒頭ですでに指摘したように、ショーレムの報告によれば 1918 年頃のベンヤミンは知覚に関する問いに取り組んでいた。その痕跡は、まとまって著述されることはなかったものの、いくつかの断片の形で残されており、次のような命題に集約されている。

知覚とは読むことである。

読解可能となるのは、諸々の平面においてのみ現れ出るものである。<sup>16</sup>

「知覚 *Wahrnehmung*」と「読むこと *Lesen*」を結びつけるこの奇妙な発想は、おそらくはカント批判に取り組む中で生じた、ベンヤミン独自の認識論と呼ぶもののである。実際に、『来たべき哲学のプログラム』と並ぶもう一つのカント論は『知覚について』と題されており、その結論部分では、哲学にとっての「絶対的な経験」である「さまざまな言語の種類のうちで種別化したものの一つが知覚である」と述べられている。<sup>17</sup> この発言の意図は、諸々の言語のなす多彩な表現が捨象しきれぬ独自の意味をもつように、知覚もまた一般性のうちに還元しきれぬ独自の側面において考察されねばならないという点にある。こうした事情を顧慮するならば、ベンヤミンは言語論を軸とした認識論を企てる中で、上述の知覚に関する命題を重要視するに至ったと想定するのが自然であろう。

さらに、この「知覚」と「読むこと」の関係については、『知覚の問いについての覚書』と題された断章の中で比較的まとまった考察がなされている。<sup>18</sup> 以下では、この断章の内容を取り上げつつ、そこでの考察がいかに関西のベンヤミンの後期作品に生かされているかを確認する。

この断章では、平面において状況布置 *Configuration* をなすものとして、知覚のほかに「記号 *Zeichen*」と「象徴 *Symbol*」が挙げられ、比較がなされる。その際、記号も象徴も知覚の形式において現れ出ることが認められるが、象徴は記号とは異なり、読まれることも書かれることもないため、これ以上の追及はなしえないとされ、考察の対象は知覚と記号の関係に絞られていくこととなる。付言しておく、ここで述べられる「象徴

<sup>16</sup> Benjamin, Walter: Über die Wahrnehmung in sich. In: *GS*, Bd. VI, S. 32.

<sup>17</sup> Vgl. Benjamin, Walter: Über die Wahrnehmung. In: *GS*, Bd. VI, S. 38.

<sup>18</sup> Vgl. Benjamin, Walter: Notizen zur Wahrnehmungsfrage. In: *GS*, Bd. VI, S. 32-33.

は、バロック論におけるように「アレゴリー」という対になる概念をもたぬため、この文脈でどのような意義をもつのかは更なる検討を必要とするだろう。とはいえ、記号と象徴の関係という初期言語論以来の主題が、知覚＝読解論を間にさしはさむことにより、いっそう複雑化していったという可能性を見てとることもできるかもしれない。

では、問題となっている知覚と記号の関係はいかんにして定義されるのか。ベンヤミンは両者の関係を、「平面」と「状況布置」の関係、いわば地と図の関係として考えている。というのも、記号は潜在的には限りなく無数の意味を表示することができるが、実際のその都度の状況における制約から、一つのことのみを意味するように機能する。これに対して知覚は、記号の表示する無数の意味を規定することで、そのうちからただ一つの意味を現れさせる平面として働く。このような意味において、ベンヤミンは知覚の成立に「解釈 Deutung」が常に同時に伴っているとみている。つまり、ここで述べられる知覚とは、解釈を成立させるものであると同時に、解釈を制約する前提にほかならない。それは、人間に共通する普遍的な知覚構造などありえないことを意味している。

我々の知覚が普遍的な妥当性もちえなないことは、後のベンヤミンにとってもいっそう重要な考察的となる。ボードレール論において取り上げられる都市における体験や、ハシッシュを用いた実験は、従来の知覚に対して強く変容を迫るものである。こうした経緯から、従来とは異なる知覚形式の可能性を芸術史上において追及したアロイス・リーグルの『末期ローマの美術工芸』にベンヤミンが関心を覚えたのは必然的であった。リーグルは、当時の美学史上でそれ以前と比べて遠近法の習熟において後退していることから「蛮風化」がみられるとされていた末期ローマの芸術を再評価するにあたり、視覚が優勢な知覚様式に対して触覚的な知覚様式を対置することで、その芸術上の意図を探ろうとしていた。たとえば、古代エジプトの奥行きを欠いた彫刻芸術にはこの触覚的な知覚がとりわけ主導的に働いているとして、以下のように述べている。

我々に知られている最古の浮彫——古代エジプトの浮彫——が目指したものは、一方では万有から個体を明瞭に引き出すことであり、他方ではそれを平面 Ebene と調停させ、それに結びつけることであった。この二つの要請は相互に制限しあっている。というのは、二つがあるいはそれ以上の個体が部分的に重なることは絶対的平面の触覚的印象 taktischer Eindruck を否定し、反対に、激しい突出は完結した個性の印



象を危うくするからである。それゆえ、エジプトの浮彫は、高さと幅において可能なかぎり鋭く明瞭に境界づけられた触覚的平面を造ったのである。しかし、それは、平面にいつそう接近する中で、つまり際立った奥行への拡がり、空間、影をすべてできるかぎり排除する中で行われた。<sup>19</sup>

エジプトの芸術が奥行、空間的な造形、影といった遠近法的表現を欠いているのは、技術の欠如ではなく、エジプト芸術の拠って立つ原理がそもそも異なることから説明される。そして、そのような原理は、そもそも触覚性を重視し、それを平面上に表そうとする知覚の在り方からきていると考えられ、そしてその裏返しとして表現に対する制約となっている。こうしたリーグルによって開かれた洞察を、ベンヤミンは『複製技術時代の芸術作品』の中で賞賛しつつも、これに一定の留保を加えて接することになる。ベンヤミンによると、リーグルが末期ローマに特有の知覚の在り方を見出したことはたしかに大きな功績であるが、しかし「広大な歴史の時空の内部では、人間集団の全体的な存在様式とともに、人間の知覚の在り方が変化する」<sup>20</sup> ことへの考察が欠けているという。すなわち、各時代に固有の知覚形式を認識するのみならず、その変化の条件を社会的、歴史的な制約のもとに見出すことが求められているのである。

こうした知覚の歴史的变化に対するベンヤミンの考察は、映画や写真といった複製技術により可能となった我々の知覚のあり方を分析するにとどまらず、一步進んで、知覚の再組織化を自覚的に推し進めるところにまで及んでいる。その際に現代の我々が慣れによって対応すべきとされるのが、触覚的な知覚であるという。この触覚的知覚の概念がリーグルからの借用であることはほぼ間違いないが、そこには用語上のずれが存在している。たとえばベンヤミンは、建造物は、旅先で眺められる場合は視覚的に、そこに住まう場合に

---

<sup>19</sup> Riegl, Alois: *Spätromische Kunstindustrie*. Darmstadt 1973, S. 95-96. なお、引用文中にて「触覚的」と訳した *taktisch* は本来ならば「策略上」とでも訳すべき語であるが、編者の注においてリーグル自身が後に「*taktisch* という語を用いたのは誤りであり、*haptisch* (触覚的) という語によって置き換えられるべきである」と述べた旨が示されており (Riegl, Alois: a. a. O., S. 32.)、それに従った。邦訳『末期ローマの美術工芸』(井面信行 訳、中央公論美術出版 2007年)においても同様の処置が施されている。

<sup>20</sup> Benjamin, Walter: *Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit*. In: *GS*, Bd. VII, S. 354.

は触覚的という具合に二重のやり方で知覚されていると述べているが、<sup>21</sup> 先のリーグルの引用の意図と比べた場合、そこに独特の意味合いが込められていることは明白であろう。

それでは、「触覚的」という語でもって、ベンヤミンはいかなる事態を指しているのだろうか。この問いに関して示唆的なのは、前川修による当時の技術革新により可能となった知覚形式と照らし合わせつつ行われた研究である。前川は当時のステレオスコープによる実験を引き合いに出しつつ、ステレオスコープが実際にはあり得ないほどの至近距離で眺めることを強いるものでありながら、知覚像を成立させたことのもつ意味を検証している。そこで生じる知覚像は、現実にはあり得ない記号の組み合わせからなりつつも、それを見るものにリアルに、触覚的につかむことができるかのように迫ってくるものであったという。それゆえ、この知覚経験は、われわれの知覚が不安定な要素を受け入れつつも成立するというを明らかにすることになり、ベンヤミンが触覚的知覚のもつ意義を強調する理由もそこにある。<sup>22</sup> つまり、触覚的な知覚は、異質な要素を遠くから静観的に眺めるのではなく、気づくことなく見過ごすのではなく、事態を自らの近くに引き寄せ、各人に再考を迫るものとしての意義をもつのである。

このようにベンヤミンの知覚論は、各時代ごとのパラダイムとしての知覚のあり方を分析することに留まらず、特異な知覚経験のうちにわれわれの日常的な知覚に亀裂を入れる契機を追及していた。こうした契機は、第一節にて述べた占星術が自明のものとして通用していた時代に対しても見取ることができるように思われる。もちろんそれは現代において実際に占星術を再興させることではなく、占星術師が星座を読み解き、解釈するその身振りを認識論的にとらえ返すという意味においてである。そこには、ベンヤミンが「読む」という行為に要求した認識論的モデルとも呼べるいくつかの特徴がある。

### 3. 認識論的モデルとしての星座

模倣論においては、人間のもつ非感性的な類似を知覚し、認識する能力は、言語のうちに求められるとされていた。その際、「読むという言葉の、世俗的な意義と魔術的な意義

---

<sup>21</sup> Vgl. ebd., S. 381.

<sup>22</sup> 前川修『痕跡の光学——ヴァルター・ベンヤミンの「視覚的無意識」について』(晃洋書房 2004年)、86～96頁参照。

という、注目に値する二重の意味<sup>23</sup>をはっきりとまといながら、そもそも「読む」ということ一般のモデルとされるのが、星座を読み解くという行為にほかならない。ベッティネ・メンケは、この読むという言葉の「二重の意味」という表現に着目して、ここでは「読むことの生産性」が「読解と星座との比喩的 - 文字通りの交差」に基づきつつ解明されていると述べている。<sup>24</sup> 以下では、文字通りの意味での、そして比喩的な意味での星座の読解についてのベンヤミンの発言を確認しながら、そこにベンヤミン独自の認識論を探り当てていく。

まず、文字通りの意味での星座の読解では、天空が平面として見立てられ、個々の星は一つのまとまりとして、模様として立ち現われてくる。その際に立ち現われる模様としての星座は、客観的というよりは恣意的な解釈によって結びつけられたものであるかもしれないが、ひとたび像を結び、常識として取り込まれてしまえば、われわれもそのように認識することになる。この構造は、通常は忘却されているが言語使用のうちでも度々見出されるものである。なぜ、ある音とある文字が結びつけられるのか、その間に答えようと文字の起源を想像してみたところで、星座の成立と同様の過程以上の答えを見出すことは難しいであろう。

とはいえこの場合、星座や文字の成立が恣意的であるかもしれないといったことは、欠陥とはならない。たとえばメニングハウスは、ベンヤミンの言語論の要点は、個々の言語要素自体が恣意的であろうとも、ある精神の本質を伴った表現を実現させることが可能であることを解明していることのうちにあると述べている。<sup>25</sup> また、ベンヤミンは模倣論を書く予備作業として書いたメモの中で、「類似性を生み出す過程を表している」<sup>26</sup> ものとして装飾 *Ornament* や舞踊 *Tanz* を例として挙げているが、これらと星座や文字を同列のものとして置いたとき、そこには確固たる模範がそもそも欠如しているという特徴が考えられる。すなわちより積極的に述べるならば、ベンヤミンの述べる模倣は、模範なき模倣、むしろ一つの範型を創出するものとして考えることができるだろう。

---

<sup>23</sup> Benjamin, Walter: *Lehre vom Ähnlichen*. In: *GS*, Bd. II, S. 209.

<sup>24</sup> Vgl. Menke, Bettine: *Magie' des Lesens – Raum der Schrift*. In: Regehly, Thomas unter Mitarbeit / Gniosdorsch, Iris (Hrsg.): *Namen, Texte, Stimmen – Walter Benjamins Sprachphilosophie*. Stuttgart 1993, S. 109-138, hier S. 109, 116-117.

<sup>25</sup> Vgl. Menninghaus, Winfried: a. a. O., S. 26-27.

<sup>26</sup> Benjamin, Walter: *Zum mimetischen Vermögen*. In: *GS*, Bd. II, S. 957.

だが、こうした新たな範型の創出は、文字や記号といった狭義の言語表現に着目するかぎりでは、ほとんど見逃されてしまいがちである。そこに、読むことの「魔術的な意義」を強調するゆえんがある。「占星術師は星の配置を天空の星々から読む。それと同時に彼は、この星の配置のうちから、将来や運命を読む」。<sup>27</sup> ベンヤミンとて、こうした占星術のなす将来や運命の読み解きに無批判的というわけではなく、そこで解釈が「恣意的、しばしば誤った」<sup>28</sup> ものであることを認めるのにやぶさかではない。しかし、占星術師が星々のうちから取り出し、固定化させようとする意味と、我々が文字や装飾、あるいは舞踊のうちで発生させている意味との間にどのような決定的な隔りがあるといえるだろうか。ここに、われわれが行うあらゆる意味作用の恣意性が認められると同時に、諸要素をその都度、幾度も読み解く解釈可能性、一種の開かれが生じていることを、むしろ積極的に認めるべきではなからうか。

こうした開かれのうちでの解釈可能性に果てしなく挑んでいくという態度は、比喩的な意味での星座の読解、つまり、『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判的序論」における星座を中心とした認識論のうちにも見出すことができる。

理念の意義はひとつの比喩 *Vergleich* によって言い表しうるだろう。すなわち、理念の事物に対する関係は、星座 *Sternbilder* の星々に対するに等しい、と。<sup>29</sup>

諸現象は個々の星々として、そしてそれらの星のなす配置の統一としての星座は理念としてたとえられている。こうした説明は、認識の構造に対する比喩であるかもしれないが、われわれが何かあるものに対して解釈をほどこす際の原型を説明しているという点では比喩以上の意義をもつといえないであろうか。ここに、『知覚の問題についてのメモ』の中で述べられていた、知覚と読むことを並置させるあの説明に近い構造を読み解くことも可能であろう。ベンヤミンは、「認識批判的序論」において「星座」の構造を、「事物的な諸々の構成要素」・「概念」・「理念」という三つの要素のもつ相互関係として、以下のよう論じている。

<sup>27</sup> Benjamin, Walter: *Lehre vom Ähnlichen*. In: *GS*, Bd. II, S. 209.

<sup>28</sup> Benjamin, Walter: *Benjamin-Archiv*, Ms 926. In: *GS*, Bd. II, S. 956.

<sup>29</sup> Benjamin, Walter: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*. In: *GS*, Bd. I, S. 214.

というのも、理念 *Idee* はそれ自身においてではなく、事物的な諸々の構成要素 *dingliche Elemente* を概念 *Begriff* において分類することによってのみ叙述されるからである。すなわち、理念は事物的な諸々の構成要素の星座として、そのように叙述されるのである。<sup>30</sup>

ここで述べられているように、理念は決して諸々の現象や事象と無縁孤立に成立するわけではない。つまり、ベンヤミンは理念を、事象の背後に隠れている謎めいた本質のようなものではなく、現象が概念のうちで分類されることで現れ出てくるものとして捉えている。それはちょうど、初期言語論において、「自然全体を通して、もっとも低次の存在から人間にいたるまで、そして人間から神へと流れている」<sup>31</sup> とされている伝達の流れとパラレルな関係にあるといえるだろう。加えて、ベンヤミン自身は、ここで「概念」に現象を理念へと参与させる「媒介の役割」<sup>32</sup> を認めているが、まさにこの媒介の役割こそ、人間による事物の言語の翻訳と呼ばれていたものにほかならないだろう。そうした意味で、こうした人間を仲立ちとして生み出されると同時に解釈される「星座」のほかにも、先ほど挙げた「装飾」、「舞踊」といった要素もまた、同様の構造をもつ表現に数え入れることができるかもしれない。

とはいえ、そこには初期言語論との間にあるいくらかの距離もまた指摘することができる。その点については、『ドイツ悲劇の根源』を執筆した後に、マルクス主義への接近の中で自らの言語論的立場に対して反省を加えている以下の書簡が示唆的である。

さて、この書 [= 『ドイツ悲劇の根源』] はたしかに唯物論的ではありませんが、そうであったとしても既に弁証法的なものでした。しかし、それを執筆していた当時は自覚していなかったことが、次第にますます明らかになってきたのです。それは、私の非常に特殊な言語哲学の立場には、弁証法的唯物論の考察方法へと通じる、ある媒介——それはいまだ非常に緊迫し、問題をもつものではありませんが——があるという

---

<sup>30</sup> Ebd.

<sup>31</sup> Benjamin, Walter: Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen. In: *GS*, Bd. II, S. 157.

<sup>32</sup> Benjamin, Walter: Ursprung des deutschen Trauerspiels. In: *GS*, Bd. I, S. 214.

ことです。<sup>33</sup>

もちろん、たびたび指摘されるように、ここで述べられる「弁証法的唯物論」の立場をマルクスや、当時のマルクス解釈のうちから求めることは、ベンヤミンの特殊な用語法を顧慮するならば事態にそぐわないことである。『ドイツ悲劇の根源』における弁証法的立場とは、言語における音声 *Laut* と文字 *Schrif* を対立関係のうちに捉える思考を指すと考えられるが、そこに欠けていた唯物論的立場とは何を指しているのであろうか。それはおそらく、現実の記号的な要素を追及する中で、一定の意味をもつものとして記号を取り扱う把握を刷新する、〈判じ絵〉としての文字の考察であると推測される。

#### 4. 記号的なものとして〈判じ絵〉としての文字

「認識批判的序論」では、初期言語論において登場した名やアダムの言語といった表現が再び見出され、「アダムの名の付与は遊びや恣意からはるかに隔たっており、むしろ、まさにこのアダムの名の付与のうちでは、樂園の状態こそ、伝達をなす言葉の意義 *Bedeutung* にいまだ奮闘する必要のなかった状態であることが確認される」<sup>34</sup> と述べられている。とはいえ、我々の住まうことの世界はすでに外的な意味・意義に取り囲まれており、そこからの脱出は不可能であるとしか言いようがない。そうした状況下で、ベンヤミンはいかに言葉のもつ意味に取り組むのだろうか。

初期言語論へとさかのぼると、人間の言語を特徴づけ、事物の言語から分かち指標は「音声」にあるとされていた。<sup>35</sup> また、「言語は決して単なる記号 *bloße Zeichen* を与えない」<sup>36</sup> とする言明は、ベンヤミンが現在の言語状態から離脱し、アダムの樂園状態へと回帰を目指していたとする印象を与えかねない。たとえば、山内志朗は、中世において精神的交感により外的な言語を用いずとも伝達をなしていたとする天使の言語の定義のうちに、現代の人間にも通ずる透明なコミュニケーションへの欲望を読み解き、危うさを指摘しているが、同時に山内はベンヤミンの『翻訳者の使命』にみられる「純粹言語」などの諸表現

<sup>33</sup> Benjamin, Walter: *GB*, Bd. IV, S. 18. (括弧内引用者)

<sup>34</sup> Benjamin, Walter: *Ursprung des deutschen Trauerspiels*. In: *GS*, Bd. I, S. 217.

<sup>35</sup> Benjamin, Walter: *Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*. In: *GS*, Bd. II, S. 147.

<sup>36</sup> *Ebd.*, S. 150.

のもつ特徴に着目し、天使の言語と同様の思想内容をもつものではないかと疑問視している。<sup>37</sup> 付言しておく、山内はベンヤミンを純粹状態に復帰できると考えた楽天主義者と捉えることには懐疑的であり、批判の矛先となっているのは、言語が自己自身以外を伝達することを墮罪とみなす初期言語論以来の言語観である。すなわち、そこでは純粹状態への回帰が可能かどうかに関わらず、墮罪後の言語をいかに捉えるかが問題視されているわけだが、こうした見解は、後期言語論のもつ射程を考察から外して成り立つものであると思われる。

改めて確認すると、ベンヤミンは記号そのものを否定的に捉えたわけではない。否定されるのはあくまで、言語を伝達の単なる道具となす見解であり、そこではある言葉が一定の事柄のみを意味するという特徴がある。もちろん状況に応じて言葉が複数の意味を表すという事態も考えるが、その場合も、言葉と事柄は対応関係を越えるものとは考えがたい。では、どのようにして記号を消極的な相関項としてではなく、より積極的に捉え返すことができるだろうか。それは、後期言語論のうちでいっそう明確となっていく、人間の読む行為における創造的、あるいは発生的な要素のうちに見出される。

ベンヤミンは書簡上でショーレムの『ゾーハル』翻訳に対して言及する中で、言語を世界状況を表すものとして捉える『ゾーハル』の記述に自らの模倣論との親和性を感じているものの、それが「流出説」に縛られていることに関しては自身と対極にあると否定的に述べている。<sup>38</sup> ここから推し量るに、ひとまず、ベンヤミンは神の言語からの一方的な展開として事物や人間の言語を説明しようとするのではない。むしろベンヤミンは、それとは正反対に、記号的な表現に着目する中で生み出されてくる意味の層に着目しているといえる。

この言語と文字の、いわば魔術的な側面は、言語や文字の他の側面、つまり記号的な側面に対して何の関係もたずに、並行性をたどって進んでいくわけではない。むしろ、あらゆる言語の模倣的なものは、ある確固とした基盤のうえに成り立つ志向なのであり、それは、模倣的なものとは異なるものにおいてのみ、つまり、この志向の基盤となる、まさに言語の記号的なもの、伝達的なものにおいてのみ、現れ出ることができ

<sup>37</sup> 山内志朗『天使の記号学』（岩波書店 2001年）、94～100頁参照。

<sup>38</sup> Vgl. Benjamin, Walter: *GB*, Bd. V, S.187.

ここで「基盤」とされる「言語の記号的な側面」を初期言語論との関わりでいかに捉えるかは、ベンヤミンの言語哲学全体のもつ射程を考えるにあたって非常に重要である。たとえば、ヴォールファルトは初期言語論での「市民的な言語観」<sup>40</sup>への批判を晩年の『歴史の概念について』における歴史主義批判と重ね合わせて検討することで、世俗的なもののうちからメシア的な要素を読み取ろうとするベンヤミンの思考範型を指摘している。<sup>41</sup>こうした解釈はベンヤミンの思考の特徴をうまく言い表したのものとして頷ける部分も多いが、しかし、結局のところ墮罪以前の状態へと回帰することがベンヤミンの目的であったかのように一般化されてしまうという難点がある。事実、ヴォールファルトは「市民的言語観」のはらむ問題点として言語の恣意性を取り上げ、そうした恣意性を生み出す記号からの脱却をベンヤミンが目指していたかのように説明している。<sup>42</sup>しかし、果たして記号そのものが混乱を生み出すのか。事態はむしろ、記号を捉える人間の認識の在り方こそがより大きく言語混乱に関わっており、それこそが「市民的言語観」と名指されている当のものなのではなからうか。

「言語の模倣的なもの」はなんらかの媒介を経ることなく現れ出ることはない。あくまでそれは、あるときは星座や舞踊、そして言語の場合ならば文字といった、形をもつ担い手があってこそ初めて現れ出てくる。ここには、記号を一定の意味を指し示す道具としてではなく、より流動的な表現とみなす観点が表れている。つまり、樂園状態とは異なる原理の中で、記号や文字に制約された墮罪後の言語の示す可能性こそが探られているといえるのではなからうか。そうした記号把握の刷新は、文字を「判じ絵 *Vexierbilder*」<sup>43</sup>として捉える際にいっそうはっきりするであろう。それは、既知のものを未知のものとなし、改めて観察する態度である。

<sup>39</sup> Benjamin, Walter: *Lehre vom Ähnlichen*. In: *GS*, Bd. II, S. 208.

<sup>40</sup> Benjamin, Walter: *Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*. In: *GS*, Bd. II, S. 144.

<sup>41</sup> Vgl. Wohlfarth, Irving: »*Was nie geschrieben wurde, lesen*«. *Walter Benjamins Thorie des Lesens*. In: Steiner, Uwe(Hrsg.): *Walter Benjamin, 1892-1940, zum 100. Geburtstag*. Bern 1992, S. 297-344, hier S. 298-300.

<sup>42</sup> Vgl. Wohlfarth, Irving: ebd., S. 299, 326-327.

<sup>43</sup> Ebd. また、前川はこうした「判じ絵」の解説というモチーフの背後にベンヤミンの精神分析への関心を読み取っている(前川修、前掲書、167頁参照)。



文字は、それを読み書きできる人間が時とともに消えたとき、後の時代の人間にとっては謎として立ち現われてくる。バロックの時代のアレゴリカーにあっては、象形文字がこのような判じ絵としての役割を担っていた。すべての象形文字を表意文字として捉えたことはバロックにおける誤解であり、一つの事物があらゆる意味を担わされることで、世俗的な世界は価値を損なう。しかし、ベンヤミンは、こうしたアレゴリーの否定的側面のみならず、「世俗的な世界はアレゴリー的な見方のなかで、格上げされると同時に価値を失う」<sup>44</sup> という二律背反に目を向ける。というのも、アレゴリーは一つの事物に多くの意味を担わせることで事物をどうでもよいものとして扱う一方で、事物を多様な意味を担うことのできるものとして、世俗的なものを超え出た力を与えているからである。こうした二律背反はバロックの時代に起こった一つの出来事に留まらず、謎めいたものや判じ絵のもとで生じる力学として、ベンヤミンの〈解説〉の理論のうちで大きな意義をもっている。語りの領域から取り残された文字は、その言語の使用者が絶えた後にも我々に対して解釈の可能性を与えてくれるものであるが、ベンヤミンにとっては、現在の言語をもそのような謎めいた判じ絵として扱うことが重要であった。

では、こうした既存のものを未知のものと思なし、あてどなく解釈を続ける中で何が見出されるのか。この問いに対しては、ベンヤミンのカフカ論が示唆を与えてくれるように考えられる。カフカの作品を読む者は、その不可解な筋の流れと断絶、突如として現れる謎めいた発言に戸惑いを覚える。カフカをユダヤ教神秘主義との関わりで読む者にとって、それはある種の啓示として映るかもしれぬが、ベンヤミンはカフカが作品のうちに真理を紛れ込ませているという見解とは袂を分かたず。そして、カフカの作品の登場人物たちの「身振りは、決して作者にとってもともと確実な象徴的な意義をもっているわけではなく、むしろ、常に繰り返し異なる連関や試行錯誤的配置のうちで、そのような意義をめぐる着手されるものである」<sup>45</sup> ことを主張する。

カフカ自身にあっては、個々の身振りは何らかの確証を、確かな意味をもって扱われることはない。ここには彼岸への道を絶たれたバロックの時代と同じく、真理を証明してくれる教義の意味は見失われており、身振りのうちで、あるいは身振りに対する解釈のうち

---

<sup>44</sup> Benjamin, Walter: Ursprung des deutschen Trauerspiels. In: *GS*, Bd. I, S. 351.

<sup>45</sup> Benjamin, Walter: Franz Kafka. In: *GS*, Bd. II, S. 418

でそうした教義が暗示されていることを模索し続けるしかない。<sup>46</sup> もしも、カフカの作品が伝えてくれるこうした途方もない道のりが、世俗的な世界で唯一我々に残されている方法であり、墮罪後の言語のなしうる在り方であるとするならば、ベンヤミンが諸言語の翻訳のうちで見出そうとした純粋言語もまた、そうした閉塞した世界に差すかもしれない微かな希望として捉えることができるのではないか。もちろん、それは到達可能かどうかすら判然としない、非常に微かなものとしてである。

むしろ、そうした予感を抱く以前の段階として取り組まれるべきは、一見すると「取り決められた記号体系」<sup>47</sup> と映る事象、言語のうちから、それを超え出た何かを見出し、捉えることである。そうした意味で、模倣論の第二稿の末尾における以下の発言は、ベンヤミンの思想を貫く意図というべきものを表している。

「いまだ書かれたことがないものを読む。」この読みこそ最も古い読む行為である。それは、あらゆる言語に先立つ読みの行為であり、内臓から、星から、あるいは舞踏から読むという行為である。<sup>48</sup>

あらゆる「読む」という行為には、字面を追い、述べられたことをそのままの形で理解するという通常の意味に加え、その奥底では、言葉通りに述べられた以上のことを読み取ろうという一種の創造的な働きが伴っている。言い換えるならば、ここでベンヤミンが到達している境地は、経験的な世界に属しながらも所与の状態にとどまらず、そこから新たな要素を生み出していくという地点であり、本稿の第一節において確認した人間の創造的能力を示している。それは、「意味の再現とは別のもの」<sup>49</sup> を求める『翻訳者の使命』で

---

<sup>46</sup> Vgl. Benjamin, Walter: a. a. O., S. 420.

<sup>47</sup> Benjamin, Walter: Lehre vom Ähnlichen. In: *GS*, Bd. II, S. 207.

<sup>48</sup> Benjamin, Walter: Über das mimetische Vermögen. In: *GS*, Bd. II, S. 213. また、アドルノはベンヤミンの「星座」のもつ役割について次のように述べているが、それはここまで述べてきたベンヤミンの判じ絵に対する態度にも通じるところがあると思われる。「哲学の使命は、隠されて現存している現実についての意図を探り出すことではなく、意図なき現実を解釈することである。その際、哲学はバラバラとなっている現実の諸要素から形象や像を構成することによって、学問・科学 Wissenschaft が簡潔に把握することを使命とする、そうした問いを止揚するのである。」(Adorno, Theodor: *Die Aktualität der Philosophie*. In: *Gesammelte Schriften*, Hrsg. v. Tiedemann, Rolf, Frankfurt am Main 1976, Bd. 1, S. 335.)

<sup>49</sup> Benjamin, Walter: Die Aufgabe des Übersetzers. In: *GS*, Bd. IV, S. 17.

述べられるベンヤミンの翻訳観と符合するものであり、「純粹言語」もまたそのような作業の果てにしか想定することができない。記号的な、事象的な世界にあくまで固執し続ける中で内側からそれを変貌させようというこの態度は、もはや樂園への回帰といった単純な構図にあてはまるものではないだろう。彼岸としての樂園へ至るのではなく、現実のさなかで別の現実を見出すこと、それがベンヤミンの思考が向かう先であるといえよう。

結びに代えて

さまざまな類似性が織り込まれた世界は、通常はそれとして気づかれることなく知覚されている。あるいはむしろ、その他の諸々の知覚の可能性を排除することによって、我々にとって〈通常の〉知覚が現れるのだといえよう。本稿では、こうした我々の知覚を転倒させるものとして後期言語論の「非感性的類似」の概念を論じ、その際に判じ絵とその解読というモチーフが主導的な役割を果たしていることを確認してきた。これは、初期言語論においてベンヤミンが明確に語ることのなかった墮罪後の言語の可能性として捉えることが可能であろう。

だが、本稿では主題を狭義の意味でのベンヤミンの言語論に限定したため、十分に論じることのできなかつた点も多い。たとえば、ベンヤミンが危機を感じ取った批判されるべき現実の問題と、それと相關的に現れてくる実践的意識の問題が挙げられる。模倣論のうちでは、我々が生きる現在との関わりの中、過ぎ去っていく瞬間のうちに、消え去ろうとするものを把握することもまた目指されていた。

類似性の知覚は、いずれにせよ、一瞬の閃きに結びついている。それはさっと過ぎ去り、ひよっとすると、これを再び獲得することもできるかもしれないが、本来は他の知覚と同じようにしっかりと保持しておくことはできない。[……] したがって、さまざまな類似性についての知覚は、時間の契機と結びついているように思われる。それはちょうど、瞬間のうちにとらえられることを欲している二つの星の合に、占星術師という第三者が居合わせるのと同様である。そのときを逃せば、いかなるすぐれた観察器具を用いても、天文学者は何も得ることがない。<sup>50</sup>

---

<sup>50</sup> Benjamin, Walter: *Lehre vom Ähnlichen*. In: *GS*, Bd. II, S. 206-207. (中略引用者)

引用文中の天文学者の比喩に表れているように、たとえどれほど条件を整えようとも、それが見出される「瞬間」を逃せば次の機会を望むべくもない。こうした「瞬間」のうちでの解説を重視する態度は『歴史の概念について』にも同じく読み取れるが、ただし、そこでは模倣論における、「ひょっとすると、再びこれを獲得することができるかもしれない」という淡い期待は後退し、「それが認識可能な瞬間のうちでのみ閃き、決して再びあいまみえることのなきもの」<sup>51</sup>とされることになる。

こうした背景を顧慮しつつ、シュルレアリスム論におけるイメージの問題や、ブレヒトの演劇における中断の意義を確認することが必要となるだろう。さらに、本稿では付随的にしか取り扱うことのできなかつた「触覚的知覚」の概念も、そうした観点から再検討がなされねばならない。だが今回は、このようなベンヤミンの模倣論が関わる射程を確認したところで本論を締めくくることとしたい。

---

<sup>51</sup> Benjamin, Walter: Über den Begriff der Geschichte. In: *GS*, Bd. I, S. 695.